上州文化

contents

巻頭言／鈴木猶仙 ②
特集 ぐんまミュージアム散歩／桑原高良 ③
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
群馬県教育文化事業団 INFORMATION ⑩
地域文化をつなぐ／小林雅夫 ⑪
ART NOW 私の絵画制作／今井充俊 ⑫
カフェの隅から パウリスタ／竹田朋子 ⑭

「スペインの古城」島岡 実

公益財団法人 群馬県教育文化事業団 2013 No.136

巻頭言　世の中に光明を

群馬県茶道会会長　鈴木猶仙

「ああいやだいやだ」とこんな嘆き節が聞こえる昨今。巷には痛ましい事故事件が報道されます。反面良いこともあります。

群馬県民にとって「やったあ・・」と欣喜雀躍する出来事があの猛暑の夏、甲子園でおきたのです。

言うまでもなく、前橋育英の高校野球全国制覇です。一回負ければ次の無い勝負は高校生にとって壮絶な戦いだったでしょう。

監督のモットウーは「凡時徹底」です。平凡な事、当たり前の事を徹底してやる。練習は勿論だが練習前の清掃も大切な事、甲子園でも宿舎付近の掃除をしたそうです。輝かしい栄光のかげで、ただ勝つ事だけに拘らない人間教育の原点を見るようで、感動を覚えたのは私一人だけではなかったでしょう。

又、東京オリンピック二〇二〇年招致が決定したことは我々日本人に夢と希望を与えてくれました。私などは人生の岐路にあった二十歳代と二度目のオリンピックを見ることが出来そうです（七年後の事ですが）。これは若者、年寄りに限らず生きる勇気も与えたのではないでしょうか。

その招致決定プレゼンテーションにおいて「お・も・て・な・し」と唯一日本語が紹介されました。

招致に至る過程に複雑なものがあることは承知の上で、やはり日本に開催をもたらしたのは、日本の安心安全、治安の良さ、秩序正しい民度の高さが各委員の支持を得たものと思われます。「電車に乗るときは乗客が降りてから」、などとことさら政府がキャンペーンせずとも、そんなの当たり前だよと言う日本人に、外国人が驚くことに驚く国民なのです。これを然らしめたのは何なのか、今、考察を加える時機に来ているような気がしてなりません。

私たち茶道では「和敬」の精神が育まれます。「おもてなし」は思いやりの心の発露です。いかにしたら他人様の役に立つか、そのことが生きがいとなる健全な精神を日本人は共有しています。

我、群馬県茶道会は来年創立六十周年を迎えます。会員は教養ある趣味人の集まりであると共に、永い歴史に込められた茶道の精神を世の中に広める義務があると考えています。日本の伝統文化として海外でも高い評価をうけている茶道の持つ魅力を皆様日本人一人一人と分かち合いたいと思います。

ぐんま ミュージアム散歩

市街地に生まれた芸術文化の発信拠点

⑧「アーツ前橋」

桑原高良

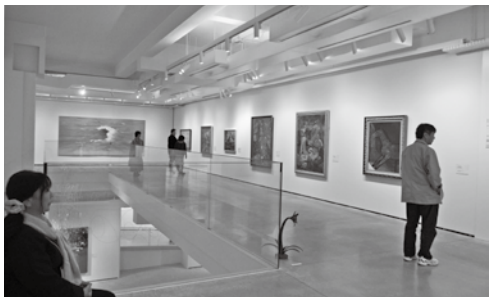
県都・前橋の中心市街地に市民待望の芸術文化施設「アーツ前橋」（住友文彦館長）が誕生した。同市初の美術館としての機能を核に、市街地活性化、文化情報の発信と交流など多彩な役割が期待される新たな施設だ。買い物ついでに立ち寄る市民も目立つ同施設をを紹介する。

前橋市の中心市街地、千代田町五丁目、中央公民館などの入る前橋プラザ元気21と通路で結ばれた向かい側に誕生した白い建物が「アーツ前橋」だ。静かな街並みに動きを与えるようなカーブした外観、よく見るとパンチングパネルにあけられた無数の穴が連続している。

芸術文化施設と位置付けられる「アーツ前橋」。もともとの建物は、かつてにぎわった旧前橋西武別館（ＷＡＬＫ館）。前橋市は、ここを美術館基本計画に基づいて改修し、新たな施設として再生させた。設計はプロポーザルコンペで行われ、建築家、水谷俊博氏事務所の提案が採用された。この年（２０１１年）は、くしくも東日本大震災の年。その後の計画が不安視される中での、船出だった。

◇美術館は長年の夢

「アーツ前橋」誕生に至るまでにも、前橋市には何度となく美術館建設への動きがあった。かつて、美術品や地元ゆかりの作家の調査も大掛かりに行われ、作品リストも作られた。前橋ゆかりの三作家（清水刀根、中村節也、南城一夫）の作品を積極的に収集した時期もあった。



１階ギャラリーは、無料で鑑賞できる

しかし都市基盤整備などその時々の当面する行政課題が優先され、加えて近年は経済情勢の変化などもあり、新たな「箱物造り」の動きは頓挫していた。

それだけに今回の「アーツ前橋」の誕生は、美術館建設に向けた市民の長年の夢がかなったともいえる。

その間、国内では大震災、前橋市では市長交代など、さまざまな動きがあった。施設も当初の市立美術館から芸術文化施設へと変更はあったが、これまでの行政や文化関係者、市民の熱い取り組みが「アーツ前橋」に結実したことに変わりない。

さまざまなワークショップ、プレイベントなどには作家のみならず多くの市民も参加した。ボランティアの若者の姿もあった。さらに館の役割や性格付けなどをめぐり数度の公開トークや語る会（アーツなカフェ）なども企画されてきた。

十月二十六日のオープンに際し、山本龍市長は、「この街が少しだけ変わっていくきっかけにアーツ前橋が少しだけお役にたてれば」と、施設の役割も

テープカットには市長も（10 月 26 日）

開館を祝い商店街にはのぼり旗も登場

踏まえ、期待を込めてあいさつした。

地元商店街には、「アーツ前橋」開館に合わせ、のぼり旗も登場。市内各所では作家が館外に出て創作する地域アートプロジェクトも始まった。

美術館としての機能を核に、中心市街地活性化、市民交流の場、芸術文化情報発信拠点など多彩な側面を持つ「アーツ前橋」。今後に期待し、注目する市民は多い。

◇世代超え、地域こだわりの展示

「アーツ前橋」では現在、開館記念展「カゼイロノハナ　未来への対話」が開かれている（平成二十六年一月二十六日まで）。詩の世界に新境地を切り開いた前橋出身の詩人、萩原朔太郎の自作本の表題から展覧会名が付けられていることからも、地域へのこだわりを持った展示であることがわかる。施設紹介も兼ねて同展を紹介する。

既存商業施設を有効活用し再生しただけに、展示スペースの構成もユニークだ。

上の階からも鑑賞できる広い展示スペース

天井には既存施設の名残も。作品とよく合う

エントランスから入った一階部分は大作が展示されたギャラリー1。ここが、無料で市民が鑑賞できるゾーンだとは驚き。買い物のついでに美術作品を楽しむこともできる。地下の展示室が吹き抜け部分から覗けるのも面白い。今回の記念展では市収蔵美術品（高橋常雄、南城一夫ら）に触発されて創作した若手作家の作品が違和感なく並んでいる。

入館チケットを渡し、次の展示スペースに向かう。途中には広い幅を持つ階段部分があり、壁面に作品が掛かる。ここからプロムナード展示、ギャラリー展示部分となり、地元作家やゆかりの人物、現代作家、文化財など多彩な展示が行われている。この中には、地元で取り組まれた戦後前衛運動を紹介するコーナーや震災後の新たな表現活動など注目の展示もある。

その作品の多くが、「アーツ前橋」の白い空間で居場所を得たように見る者に感じさせるから不思議だ。吹き抜け部分や通路部分が壁面とマッチし、一つの作品のように見えるのも発見だった。

まるで増殖中のような作品も

鑑賞後には、図録や美術書、ワークショップ資料などが並ぶアーカイブゾーンでゆっくりするのもよい。ミュージアムショップも充実、カフェもある。いずれも表通りから自由に入れる。出会いと交流の場としての役割も果たしている。

貴重な資料が並ぶアーカイブゾーン

充実したミュージアムショップ

「アーツ前橋」

〒371-0022　群馬県前橋市千代田町5-1-16
☎027-230-1144　Fax 027-232-2016
bunka@city.maebashi.gunma.jp
開館時間：11時～19時（入場は閉館時間の30分前まで）
休館日：水曜日、年末年始
入館料：大人800円　大学生600円　高校生以下無料
団体（10人以上）割引あり

住友文彦館長に聞く

「日常の中での存在に」

―市民待望の「アーツ前橋」がオープンしました。準備から関わり開館まで三年、現在の心境からお聞きしたい。

住友　今思うとよく三年でできたなと思います。私は当初、事業規模と街との関係などから考えて、このミッションは五年くらいかけるのが適正かなと思っていました。これまで公立の美術館、私立美術館などに携わった経緯からしても、この美術館は機能として複雑な機能を持っています。単に収蔵品を展示し学芸員が調査研究しますというだけではなく、いろんなお客さんを相手にする施設で、しかも郊外ではなく街の中にできるということで施設管理面からしても、開館まで時間がかかると考えていました。ですから三年でここまで来たというのは、正直言って短かったと思います。その一方で、（市長交代など）紆余曲折もあったので、ようやく開館できたという思いもあります。両方ですね。

―「アーツ前橋」は、活動コンセプトに「創造的」「共有」「対話的」を掲げています。他館との違いもここにあるのですか。

住友　群馬の場合、群馬県立近代美術館、高崎市美術館、私設ではハラミュージアム アークなど歴史のある美術館があり、そういう館も意識して準備してきました。前橋は作家の多い地域です。背景には、戦前の絹産業などの富の集積があり、その人たちが作家の創作を支援してきました。そのことは、画廊が数多くあることでも分かります。私たちは、その歴史を引き継ぐとともに、自分たちの周りにいる若い作家たちを応援し、新しい創造の機会や発表の場を作ることが重要になってきます。作家たちを後押しし、活動しやすくしていくことに館としても一歩踏み込んでいきたい。

「アーツ前橋」について語る住友館長

県立の美術館などは、成り立ちからして「啓蒙活動の場」という意識が色濃く出ています。誕生したばかりの当館とは開館時の社会環境が違います。今では、人々は好きな美術作品を見るためには海外へも行くし、都内の美術館へも行く。美術に対する知識や経験も豊富です。この方々と、私たち美術館の人間の知識や経験をどう交換し対話していくかも大切になります。具体的には、これまで市内で取り組まれてきたゼミ形式の参加型アートスクールなどもその一環です。ここでは参加者が情報を持ち寄って意見交換、「文化年表」作成やサポーターの役割などを学びました。

―街中の美術館ならではの特色は。

住友　美術館は、まだまだ敷居の高いところで、非日常の場として意識されています。「アーツ前橋」は、市中心部にあり仕事帰りにちょっと寄っていく、待ち合わせの場として利用するなど日常に組み込まれた場としての側面も持っています。このように芸術や美術館が、もっと日常の中に組み込まることは素敵なことです。この館の立地については、いろんな意見がありますが、街中の美術館として人々の暮らしの中に芸術が組み込まれることのメリットは大きいと思います。既に、館の一階に設けられた入場無料の展示スペースには買い物途中に立ち寄る人も増えてきました。

―来場者には、どこを見て、何を感じてほしいですか。

住友　三年間、前橋に暮らしてみて、市民が自分たちの街に自信を持っていないように感じられ、残念に思いました。外から来た私からみると、自然が豊かで、落ち着いた街です。館内の展示は、地元ゆかりの作家で構成されています。個性的で実力のある作家が多く、作品も素晴らしい。音楽家や科学者、植物学者の仕事を意識した作品もあり、文化財も飾られています。これらからは、地域のプライドが感じられます。公立美術館は、世代を問わず、幅広く多くの人たちに鑑賞してもらわなければなりませんが、三十代以下の人たちは価値観の変化する時代にどう対応すべきか、地域の中で自分の価値観とマッチした活動はどうあるべきか、社会への不安を抱えています。展示を通して、自分たちの文化、自分たちの地域に、自信と頑張るメッセージを感じてもらえればと思います。

―「アーツ前橋」の役割や今後の活用について。

住友　市収蔵美術品のうちまだまだ展示できていないものもあります。今後、順次紹介していきます。この中には、素晴らしい作品も数多く含まれています。当然、調査・収集にも力を入れていきます。予算も限られていますが、まずは継続してこの取り組みを続けていきたいと思っています。

「アーツ前橋」の、もう一つの役割として、若手作家と国内外で活躍する美術関係者との橋渡しがあります。この文化のネットワーク作りは、次世代を担う人材の発掘育成にもつながります。また、多くの出品がある市民展に対して、私たちがどう関わり、何ができるのかも考えていきたいですね。

◎館長おすすめスポット

「空」の看板

駐車場屋上にある「空」の看板（廣瀬智央氏と「のぞみの家」の子供が撮影した空の写真）＝**写真**＝を挙げさせてもらいます。下から見上げると背景の空と看板が重なって見えることや、両毛線に乗っているときにも街なかに「空」の看板が見えます。実際に駐車場の屋上にあがるとこの看板が近くで見えて、そこから見える赤城山の風景が好きです。

桑　原　高　良
（くわばら　たかよし）

群馬ペンクラブ理事、群馬県文学会議会員。

1950年生まれ。74年に上毛新聞社入社。藤岡支局長、前橋支局長、編集局文化生活部長、出版局次長、文化情報誌「上州風」編集長、編集局次長などを経て太田支社長。館林シャトルおよび高崎タカタイの編集長。2011年3月退職。現在、中央カレッジグループ学園新聞編集長。著書に『二足の草鞋と本音人生―聞き書き大川栄二』『わがこころ　語る上州人　塩原友子』『初代コロムビア・ローズ物語―人生は歌とともに』（いずれも上毛新聞社刊）。

上野東歌探訪

(15)

北川和秀（きたがわかずひで）　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

前回は上野国東歌・防人歌に見える東国方言を取り上げて、簡単な分類整理を行った。今回は他国の例も含めて検討する。ただ、先を急ぐ必要が生じたので、方言のことは簡単に述べるに留め、他に五首ほど読み進めることにする。

一、関東方言と東海方言

東歌・防人歌に見える東国方言は、関東地方と東海地方とでその傾向を異にする。関東方言と東海方言と、そのそれぞれに見える主な特徴を箇条書にしてみる。まず、関東方言には次のような特徴がある。

①接尾辞の「ろ」を多用する。

「伊香保ろ」（上野）、「家（いは）ろ」（武蔵、上野）、「子ろ」（相模、常陸、下野など）、「背ろ」（武蔵）、「嶺（ね）ろ」（相模、上総、常陸、上野）など。ただし、「子」については「子ら」という語形もあり、東歌・防人歌では信濃、相模、上野に例がある。上野以西は「子ら」、相模は「子ら」「子ろ」共存、下野以東は「子ろ」という分布が見える。

②幾内の「ち」が「し」になる。

「あめつち（天地）」→「あめつし」（下総）、「おもちち（母父）」→「おもし」（下野）、「かち（徒歩）」→「かし」（武蔵）、「はなち（放ち）」→「はなし」（上野）など。

③幾内の母音ウ列音がオ列音になる。特に動詞の連体形において目立つ。

「こす（越）」→「こそ」（下総）、「はふ（延）」→「はほ」（武蔵、上総）、「ふる（降）」→「ふろ」（上野）、「む」（推量む）→「も」（相模、上野など）、「なむ（助詞）」→「なも」（上野）など。

④幾内の母音イ列音がエ列音になる。特に形容詞の連体形において目立つ。

「あしき」→「あしけ」（下野）、「うつくしき」→「うつくしけ」（武蔵）、「かなしき」→「かなしけ」（常陸、上野）、「くやしき」→「くやしけ」（下野）など。

⑤幾内の母音エ列音がア列音になる。

「いへ（家）」→「いは」（武蔵、上野、下野）、「たてり（立）」→「たたり」（下野）、「ふれる（降）」→「ふらる」（常陸）、「ほせる（乾）」→「ほさる」（常陸）、「わすれ（忘）」→「わすら」（常陸、駿河）など。

⑥幾内の母音イ列音がウ列音になる。

「あしび（葦火）」→「あしぶ」（武蔵）、「こひし（恋）」→「こふし」（武蔵）、「ゆり（百合）」→「ゆる」（常陸）など。

一方、東海方言には次のような特徴がある。

⑦幾内の母音オ列音がエ列音になる。

「ぞ（助詞）」→「ぜ」（駿河）、「と（助詞）」→「て」（駿河）、「よ（助詞）」→「え」（駿河）、「おもかはり（面変）」→「おめかはり」（駿河）、「おもへ（思）」→「おめほ」（駿河）、「ことば（言葉）」→「けとば」（駿河）、「こもち（子持）」→「こめち」（駿河）など。

⑧幾内の母音エ列音がオ列音になる。（信濃と下総とにも見える）

「おもへ（思）」→「おめほ」（駿河）、「かげ（影）」→「かご」（遠江）、「こえ（越）」→「こよ」（信濃）、「ささげ（捧）」→「ささご」（遠江）、「われ（吾）」→「わろ」（駿河）など。

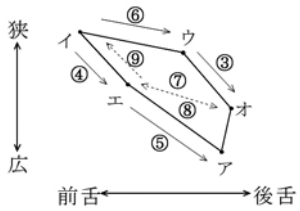
⑨幾内の母音エ列音がイ列音になる。（関東の東海道諸国にも見える）

「いへ（家）」→「いひ」（駿河）、「かね」→「かに」（武蔵）、「かへり（帰）」

→「かひり」（駿河）、「しまかげ（島陰）」→「しまかぎ」（下総）、「つげ（告）」→「つぎ」（常陸）、「め（妻）」→「み」（駿河）など。

右のうち③～⑨は母音交替のケースである。変化の方向を母音図で示す。

当時の母音の実際の音は明らかでなく、またこの図にはいわゆる上代特殊仮名遣も反映されていない。あくまで大雑把な模式図とご理解頂きたい。その上でこの図を見ると、関東方言（③～⑥）においては、母音は畿内よりも口の開き方は広く、舌の位置は後ろへという方向性が看て取れる。一方、東海方言（⑦～⑨）においては、オ列音とエ列音との区別が曖昧なことと、エ列音からイ列音へ（口の開き方は狭く、舌の位置は前へ）という傾向が覗える。



母音図

二、上野国東歌のうち方言を含まない歌、また未勘国歌について

上野国東歌の中に東国方言を全く含まない歌が何首かある。その中にはたまたま畿内と同じ語形の語のみでうたわれた歌もあろう。しかし、東国方言を含まない歌の中には畿内の歌に同趣旨の歌のあるものが何首か見られる。

a 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ勝れ（三四一七）
b 淡海の海沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ勝れ（二四四五）
c 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）
d 韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし（三六七〇）
e 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）
f 白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（二七二五）

これらの東歌は、畿内の歌を真似て作ったために東国方言が含まれなかったか、あるいは都から上野国に下ってきた官人の作なのかもしれない。

未勘国歌の中で、「子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ」（三四九四）の歌は上野国の歌かといわれる。言葉の上からは、傍線部「も」も「あど」も上野国の歌にも例のある関東方言なので、上野国の歌としておかしくはない。もしも東海地方の歌なら、「こもち山」は「こめち山」となりそうである。上野国と確定はできないまでも、その可能性は高いと考えられる。

同じく未勘国歌で「佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる」（三四七三）の歌も上野国の歌とされることがある。この歌の傍線部「遠か」「も」は関東方言であるが、「子ろ」は上野国の歌では「子ら」という形を取る。時代による変遷もあるかもしれないし、上野国内でも地域差のある可能性もあるので、決め手にはならないが、この歌を上野国の歌と考える上でのマイナス要素にはなろう。

三、本歌の後に異伝を載せる歌

上野国東歌には、歌の直後に異伝を載せる歌が一首ある。次の歌である。

上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）
可美都気努　乎度能多杼里我　可波治尓毛　児良波安波奈毛
比等理能未思弖

上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなぁ。
一人だけで。

「乎度」は不明。地名と考えられるが定かではない。次に述べるこの歌の異伝には「小野」とあり、「をど」と「をの」とは音がよく似ているので、「小野」

の音韻変化形と思われる。「多杼里」も不明。直後にある「川路」と関連づけて考えるならば、動詞「辿る」が名詞化したものか。「子」は「あの娘」。「ら」は親愛の情を示す接尾辞で、単数にも複数にも用いるが、ここは単数である。「なも」は他者への希望を表す助詞で、「～してほしい」。

この歌の川路は、普段あまり人が通らない道なのであろう。そういう場所で、誰の目にも触れずに、あの娘と二人きりで逢いたいという男の歌である。

この歌のすぐ後には、「或る本の歌に曰はく」として次の歌が載っている。

上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに

可美都気乃　乎野乃多杼里我　安波治尓母　世奈波安波奈母
美流比登奈思尓

上野国の小野の多杼里の安波治ででも、あなたと逢えたらなぁ。誰にも見られずに。

「小野」は地名であろうが、上野国には小野という郷名が甘楽郡、緑野郡、群馬郡にあり、いずれであるか決めがたい。郷名よりもさらに小さい地名の可能性もある。「安波治」は不明。本歌の「川路」と音が近く、その音韻変化形と思われる。人に見られずに彼と逢いたいという女の歌である。

二つの歌の上三句は音がよく似ており、伝承の過程で生じた音韻変化形と考えられるが、下二句には、男の立場の歌、女の立場の歌という違いがある。男女どちらもうたえるように男性用・女性用が作られたのであろう。

相模国東歌の中にある次の歌も参考になる。

①相模嶺の小峰見隠し忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くな（三三六二）
（相模の山の峰を見て見ないふりをするようにして、やっと忘れかけてきた妻の名を口にして、私を泣かせないでくれ）
②武蔵嶺の小峰見隠し忘れ行く君が名かけて吾を哭し泣くる（同　或本歌）
（武蔵の山の峰を見て見ないふりをするようにして、やっと忘れつつあるあなたの名を口にして、私を泣かせることだ）

②の歌は、①の歌のすぐ後に「或る本の歌に曰はく」として載っている。①の歌には「妹」とあるので男の歌、②には「君」とあるので女の歌である。②には「武蔵嶺」とあるので、こちらは武蔵国の部に収めるべきものであるが、②は明らかに①の異伝とみて、このように処理したのであろう。この異伝も男の立場の歌・女の立場の歌という関係にある。

こういった、本歌と異伝とで歌の内容の性別が異なるという現象からは、東歌の民謡的性格が垣間見えるように思う。

写真は、藤岡市中下郷の泡輪神社の境内にある「乎度の多杼里」の歌とその或本歌の歌碑である。緑野郡の小野郷はこのあたりと推定されている。

「乎度の多杼里」の歌の歌碑

四、「伊香保ろの岨の榛原」

上野国東歌に「伊香保ろの岨の榛原」とうたった歌二首と、これとよく似た「伊波保ろの岨の若松」とうたった歌一首とがある。これら三首をまとめてよむことにする。

伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し良かば（三四一〇）

伊香保呂能　蘇比乃波里波良　祢毛己呂尓　於久乎奈加祢曽
麻左可思余加婆

榛名山の急斜面のハンノキ林の地中で細かく絡み合っている根のように、こまごまと将来のことを心配するな。今さえ幸せなら。

「伊香保ろ」は榛名山。「岨」は急斜面で、「聳ゆ」と同根の語。「沿ひ」の意にとって、隣接したところとする説もある。「榛」はハンノキ。「ねもころ」は、植物の根が土中で細かに絡み合っているさま。そこから、「細かく見るさま」「細やかに心遣いするさま」という意味に用いられる。後に音韻変化して「ねんごろ」という語形になった。「伊香保ろの岨の榛原」は「ねもころに」を導くための序。「将来」と「現在」との対比は、上野国東歌の「吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも」（三四〇三）にもみえた。「かぬ」は現在の時点で将来のことを考えること。「し」は強意の助詞。「良かば」は「良けば」の方言形。作者の性別は分からないが、先々のことを慎重に考えている女に対して、今のことを第一に考えている男の歌であろうか。

伊香保ろの岨の榛原吾が衣に着きよらしもよひたへと思へば（三四三五）

伊可保呂乃　蘇比乃波里波良　和我吉奴尓　都伎与良之母与
比多敝登於毛敝婆

榛名山の急斜面のハンノキ林のハンノキは、私の衣服によくなじんで染めてくれる。私の着物は一重だから。

ハンノキの樹皮や実は染料に用いる。「よらし」は「よろし」の古形。染まり具合がよい。「もよ」は詠嘆。「ひたへ」は「一重」の方言形。裏地が付いていない着物。この歌は譬喩歌の部に収められている。右には表の意味を載せた。ウラの意味（そちらの方がこの歌の趣旨である）は、「あの娘は、私としっくりとなじむ。それは、私がひたすらにあの娘のことを思っているからだ」となる。「榛原」に女を、「吾が衣」に自分を譬える。「着きよらし」は相手とよくなじむ。相性がよいこと。「ひたへ」は、自分が裏もなく一途に相手を思っていること。

右のように「伊香保ろの岨の榛原」という句が複数の歌によまれているところをみると、榛名山のハンノキ林は有名だったのであろう。ハンノキは痩せた土地でもよく育つ。榛名山は六世紀の噴火によって、樹木が失われてしまった部分もあったことであろう。そこにはハンノキなどが最初に生育したと思われる。「伊香保ろの岨の榛原」という句は、そういう榛名山の姿をよんだものではあるまいか。なお、榛名山という山名も「榛」に由来する可能性がある。

ハンノキが荒廃地でもよく育つということは、群馬県立女子大学の県民公開授業「群馬の文学」を受講された県民の方に教えて頂いた。感謝申し上げる。

伊波保ろの岨の若松限りとや君が来まさぬうらもとなくも（三四九五）

伊波保呂乃　蘇比能和可麻都　可藝里登也　伎美我伎麻左奴
宇良毛等奈久文

高く聳える岩の崖っぷちに生えている若い松ではないが、もうこれ限りというつもりだろうか、あなたは来ない。私は心もとなく思っているのに。

この歌は未勘国歌の部に収められている。「伊波保」は「巌」。「ろ」は接尾辞。ただし、見てきたように「伊香保ろの岨」という類似の句があるところをみると、「伊波保ろ」は、「伊香保ろ」の誤伝かもしれない。上二句は「限りとや」を導く序詞。若松の生えている場所が崖っぷちなので、「限り」にかかる。さらに、「若松」には「わが待つ」の意も籠められていよう。「来まさぬ」の「ぬ」は連体形で、「や」の係り結び。「うら」は、人から見えない内面の心、気持ち。「うらもとなし」は「心もとない」。「君」とあるので女の歌である。待ちかねている男が来ないので、最早二人の仲は終わりなのかという不安な思いを抱いている。

❖ 第37回県民芸術祭参加事業

オペラレクチャー
「知っておきたいオペラ20選」vol.7

俺たちの旅路、理想の人は何処に

日　　時　平成25年11月30日（土）15：00開演
曲　　目　オッフェンバック／ホフマン物語
　　モーツァルト／ドン・ジョバンニ
出　　演　構成・ナビゲーター／ウーロン亭ちゃ太郎
　　ソプラノ／鈴木麻里子
　　ちゃ太郎・オペラ・カンパニー
会　　場　ベイシア文化ホール　小ホール
　　（前橋市日吉町1-10-1　027-232-1111）
入 場 料　全席自由　1,000円(未就学児入場不可)

ウーロン亭ちゃ太郎

鈴木麻里子

❖ 第37回県民芸術祭参加事業

伝統歌舞伎の祭典

日　　時　平成26年1月18日（土）11：00開演
演目･出演　半田歌舞伎坂東座　吉例曽我の対面　工藤館の場
　　平出歌舞伎保存会　絵本太功記　十段目　尼ヶ崎閑居の場
　　赤城古典芸能部　鎌倉三代記　絹川村閑居の場
会　　場　ベイシア文化ホール　小ホール（前橋市日吉町1-10-1　027-232-1111）
入 場 料　無料（要整理券）

❖ 第37回県民芸術祭参加事業

群響特別演奏会
～珠玉の二大コンチェルト vol.2

日　　時　平成26年2月2日（日）15：00開演
曲　　目
　モーツァルト／ 歌劇《フィガロの結婚》序曲
　メンデルスゾーン／ ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64
　ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番　変ホ長調 作品73「皇帝」
出　　演　指揮：渡邊一正
　　ヴァイオリン：松田理奈　ピアノ：横山幸雄
会　　場　ベイシア文化ホール　大ホール
　　（前橋市日吉町1-10-1　027-232-1111）
入 場 料　S3,000円　A2,000円　B1,000円
　　未就学児入場不可

渡邊一正

松田理奈

横山幸雄

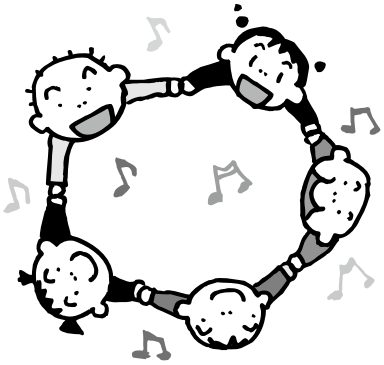
❖ 第37回県民芸術祭参加事業
メディア芸術推進事業

第１回 GUNMA マンガ・アニメフェスタ

会期：平成26年2月8日（土）～11日（火・祝）10時～17時
会場：ベイシア文化ホール（群馬県民会館）展示室ほか

マンガとアニメの２部門の応募作品から選ばれた受賞作品の展示・上映や、ワークショップなどのイベントを行います。また、第16回文化庁メディア芸術祭国内巡回事業を同時開催します。優れたメディア芸術作品の鑑賞機会を提供し、本県におけるメディア芸術の振興と普及を図ります。

※「メディア芸術」とは、映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術のことです。



地域文化をつなぐ

渋川市文化協会　会長
小　林　雅　夫

多くの力が支える、伝統文化

先日、ユネスコが「和食」を世界の無形文化遺産に登録する見込みであると、報道各社が伝えていました。和食は、その土地土地でその季節に採れた食材を調理するもので、何処でも当たり前に行われてきた営みだと思います。

しかし、昨今は、イタリアン、中華、フレンチなど食の多様化が進んできており、「一日一回は肉を食べる」という食事スタイルが、日本でも多くなってきました。反面、欧米では「健康によい」と日本食に熱い眼差しが向けられています。皮肉なものですね。

ここからは、少し我が郷土渋川の自慢になります。渋川市の文化協会では、古典芸能の「能」と「歌舞伎」を特別に応援しています。

「しぶかわ能」は、今年は八月二十九日に市民会館で開催されました。これは市内の十中学校の生徒と市民に、能楽を実際に見てもらい、本物の醍醐味を味わってもらうために毎年行われているもので、今年で十四回目です。来場者は、初めに能の基礎知識についての解説を聞いた後で仕舞い、狂言、能の順に鑑賞します。日本の古典芸能を中学生の時に味わってもらいたいとの思いからです。

一方、市内では渋川子ども歌舞伎、渋川歌舞伎、赤城歌舞伎古典芸能部、半田歌舞伎坂東座など四座が活動しています。活動の場は、市民文化祭の他に「伝統歌舞伎の祭典」（平成二十六年一月一八日　ベイシア文化ホール）として、群馬県教育文化事業団が発表の機会を提供しています。

そもそも本市の赤城地区には、今から一九〇年前に永井長次郎によって作られ、現在、国の重要有形民俗文化財になっている「上三原田歌舞伎舞台（廻り舞台）」があり、今も使われている土地柄なのです。

能は専門家を招いて公演していますが、歌舞伎は浄瑠璃や三味線を除けば、地元の人たちによる手作りです。四人の子供全員を、小学校低学年から歌舞伎の舞台に立たせ、今も子どもたちが熱心に取り組んでいる歌舞伎一家。廻り舞台の操作を伝承している熱い男衆のいる地域など。

伝統文化を守る活動は、そんなに簡単なことではありません。国・県・市などのバックアップの他に、多くの人の熱い情熱に支えられているのだと言うことを実感しています。

渋川こども歌舞伎

私の絵画制作

今井充俊

私は、昭和三十二生まれで、今で言う「昭和レトロの時代」に青年期を過ごし絵を描き始めました。そして、いつの間にかベテランエカキと言われています。

そんなレトロ人が最近気になっていることがあるのです。ちまたにある、「手作り○○」の言葉や文字です。たとえば、「手打ちうどん」の看板。うどんは、そもそも手で作っていたもの「手打ち」とこだわらなければならない悲しさかな。（うどん屋さんすみません、時代の話です。）「手打ちうどん」、旨いに決まっている手間暇かけているのだから。パソコンや理解できない器機を、いとも簡単に操り情報を得、ものを創る若者たちだって知っています。「旨い」ってこと。

手間暇と言えば、感動したことがありました。NHKアーカイブスの番組で「明治神宮」を放送していました。その中で「明治神宮の森」の話があり、今から九十年ほど前「本田博士」という人が中心となって森を創ったとのこと。氏は、草むらや沼地であった場所をこの土地にある木を生かすことから始め、アカマツやクロマツを植え、その間に成長の早いヒノキ・サワラ・スギ・モミなどの針葉樹を植え、その下にカシ・シイ・クスなどの常緑広葉樹を植えた。人の手を介さず、自ら世代交代を繰り返し森になって行く。五十年・一〇〇年後を見据えた氏の「知識・創造力・感性」が凄い。「今の日本に氏のような人材が必要なのではないか。」そんな気がしてなりません。三十年ほど前、旧宮城村か粕川村の県道に「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く、昔はみんな歩いてた。」と、書かれた交通安全の看板があったのを思い出しました。思わず笑ってしまい、私も車のスピードを落としたものです。あの看板は、今でもあるのでしょうか。

ナウとは、何でしょうか「今・現代」。人は、青年期をリアルタイムで引きずりながら生きて行くもののようです。レトロ人が、ナウを「アアジャネエ、コウジャネエ。」と言っても愚ちっぽくなるだけです。「マワルマワルヨ時代ハマワル・・・・」と、昭和の歌がありましたっけ。そんなこんなで、私自身の絵画制作について書くしかないようです。

私は、平成七年文化庁芸術家在外研修員として、一年間イタリアに留学しました。それまで、公募展やコンクールで入賞し、少し自信を持ち始めていた三十八歳のときでした。研修のテーマは、「フレスコ画の研究と制作」で、基底材（カンバス・壁など絵が描かれている物）を含めた絵画の存在することの美しさの追及でした。上野の国立博物館で観た「法隆寺展」の、台座を含めた仏像の存在する美にひきつけられ、フレスコ画や祭壇画に共通点を見つけることも狙いでした。当時、群馬県から文化庁で派遣されるのは初めてとのことで、各分

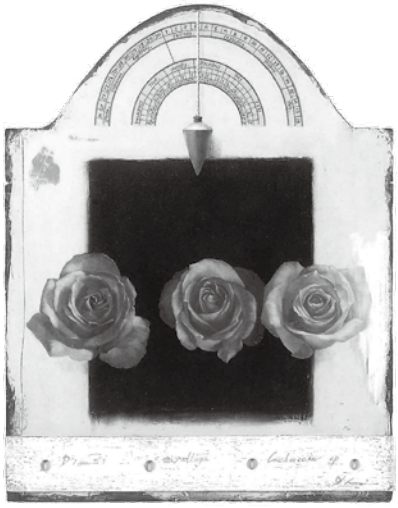
フラスカーティー 2007

…Preghiera… 2011

野の方が集まって壮行会をしていただき、イタリアに行きました。それまでの、描いた絵や技法をリセットして真っ白になって吸収しようと思いました。ローマ国立美術アカデミアに通い、アルド・トゥルキアーロ教授の聴講生として、フレスコ画を学ぶはずでしたが、何と氏は油絵の先生で、この大学にはフレスコの先生はいないことが分かり、留学早々壁に当たりました。文化庁に提出した計画通りアルド先生に師事するか、他の機関を探すか悩みましたが、自分の勉強にならないことこそ不誠実と考え大学を諦めました。拙い英語とボンジョルノ位しか話せないイタリア語でローマ公立のフレスコ学校を見つけ、通うことになりました。この学校にはイタリア人は勿論、ドイツの留学生もいて、プロの画家も学ぶなどレベルの高いところでした。先生のエジディオ氏は、国内外でフレスコ画を描く画家で、途中参加の東洋人を壁の塗り方から個人指導してくれました。この学校で、マサッチョとミケランジェロのフレスコ模写を描き、本場の技法を学ぶことができました。フレスコ画特有のマットな質感と鮮やかな色彩は、その後の絵画制作に生かされることになりました。

留学中の生活は、オルヴィエート（後に前橋市と姉妹都市となった）に住み、ローマの学校に電車で一時間かけて通い、帰りはローマテルミニ駅、一〇時三〇分発の最終ボルザーノ行で、家に着くと午前〇時を過ぎていました。夜汽車から見える丘の上のオレンジ色の街明りに、「五木ひろし」の曲が流れてきます。「五木ひろし」は、イタリアの風景に負けません。ジャパニーズロックやシャレた歌は軽く空々しく風景に負けてしまいました。

一年間たくさんの名画を観て、その質の高さに打ちのめされましたが最後に残ったものは、日常生活で感じた「文化とはなにか」と言うことでした。言葉や文字が、文化の集約されたものではないか。たった数時間飛行機に乗っただけで、何の疑問も持たずに使っていた日本語が全く通用しない。通用しなければ意思を伝えるべき言葉ではなくなること。ミケランジェロやダヴィンチの文字も、読めなければ文字でなくなること。それぞれの、価値は変わらないが、条件が変わると価値観が変化すること。当たり前のことに気づかされました。帰国後、絵画制作の思考方法が変わって行き、ミケランジェロの手記にある意味不明の文字を絵のモチーフに使い、誰にでも分かる花や果実を意思を伝える、「言葉」として絵を描きました。絵肌もフレスコ調の風合いを出すため、テンペラ絵具と油絵具の練り合わせた物を作って描き、物としての存在感を追及するようになりました。バラの花を三つ描き、背景に文字を描きこんだ、「3つの言葉」シリーズの始まりになりました。これらの作品が、群馬県展で山崎記念特別賞になり、また日動画廊での昭和会展で日動美術財団賞の受賞につながりました。昭和会賞決定の寸前、一人の審査員から「デザイン的」との反論があり、この年は、一等賞無しの二等賞になったと後日知らされ残念でしたが、私らしいとも思い笑ってしまいました。今でも、このシリーズは続いています。


3つの言葉 2007

そして、3・11が起こりました。当日、アトリエで制作していたら、ラジオから緊急地震速報が流れ、強い揺れに庭に避難しました。テレビでは、東北の大津波の映像が流れ、あげくに福島原発の放射能漏れと続き、この世のこととは思われない事態。沢山の人々が犠牲になり、今でも多くの人々が苦しんでいます。当時は、日本中が痛みを共有したかのように沈んでいました。私も、同じでした。この事態に接して、「一瞬にして壊れてしまう日常生活・痛みの共有」をどう捉えればよいのか、今でも分からないでいます。「人と人の関係の中で痛みの共有が可能か。」幸せに思える人にも必ず、痛みが訪れる事実。生きとし生けるものすべての平穏を祈る気持ちで制作に取り組んでいる今日です。私にとっての絵画制作は、アートと横文字で呼ぶものでは決してなく、自分自身の生活の中から生まれ出た痛みなのかもしれません。

今井充俊　略歴

1957年　前橋市生まれ
1984年　二紀展初出品（宮本賞、黒田賞、他）
1995年　文化庁芸術家在外研修１年派遣イタリア留学
1996年　Circolo Artistico Politecnico・Napoli 個展
1998年　群馬県美術展　山崎記念特別賞受賞
1999年　第34回昭和会展　日動美術財団賞受賞
　　チェントロ・デル・モンド現代美術展イタリア　グランプリ
2002年　日動画廊個展（07、11、14）
2003年　「DOMANI・明日」東郷青児美術館
2011年　笠間日動美術館にパレット収蔵
・現在　　二紀会委員、群馬県美術会常任理事
・作品収蔵　群馬県立近代美術館、笠間日動美術館、
　　イタリア・フォリーニョ市、群馬県文化事業団、上毛新聞社　他

カフェの隅から

パウリスタ

竹田朋子

長い間私は、「銀ブラ」の言葉の意味を、銀座をブラブラ歩くこと、だと思いこんでいた。しかしその語源は（諸説あるらしいが）銀座でブラジルコーヒーを飲むこと、だと知り、「えっ！」と思わず声をあげてしまった。「銀座のカフェーパウリスタで、ブラジルコーヒーを飲むこと」の総称なのだそうだ。

銀座の「銀」と、ブラジルコーヒーの「ブラ」をとって「銀ブラ」というようになったのは、大正四、五年頃からで、慶応義塾の学生たちから生まれた言葉らしい。

「カフェーパウリスタ」は、明治44年に開業した日本最古の喫茶店で、現在も銀座八丁目に盛業中とのことだ。どのようなカフェだろう？　明治、大正の文人たちがこよなく愛したというから、落ち着いた佇まいなのだろう。

かつて、子育て真っ最中の頃の私の夢は、「すてきなカフェで、独りでお茶を飲むこと」だった。二人の子どもたちを片時も離さず、ひたすら抱っこし、おんぶをし続けていた私の、ささやかな願望だったのだ。

そのカフェの仕事に現在携わり、さらにいまこうして「カフェの隅から」と題されたページに文章をしたためている── 何だか不思議である。

執筆の依頼を受け、初めてこのタイトルに出会ったとき、（何て、すてきな……）と少し驚き、なぜか嬉しかった。「季節感のある、みずみずしいエッセイを」との仰せである。

果たして私に書けるだろうか？　いえ、書かせていただくのだ、書きたい、と思えた。タイトルに引っ張られて書き続けてこられた気がする。

私の書く随筆は、常に原稿用紙五枚程だ。自然にその長さに収まる。随筆は、ほぼみな同様だろう。しかしこのページは二枚半だ。当初は少し戸惑ったが、いまではこの長さが心地よく、より私に合っていると思える。それもタイトルの成せる技だろうか？

されげなく知的で、一輪の花があり、よい気が流れている── そんなイメージの「カフェの隅から」。そこに文章を綴ることが許された私は、なんて幸せなのだろう。

いつの日か「カフェーパウリスタ」を訪れたい。そして隅の席に座り、このタイトルをつぶやくのだ── 少女のような夢をみている、晩秋である。

竹田　朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

レストラン　伊万利ダイン
前橋市文京町 2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL 天坊

政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬

味わいの旅

―四つの食事処で料理が選べる

想いを"かたち"に。

株式会社 藤田ビジネスプロモーター

前橋市問屋町 1-1-1 TEL 027-251-4455 (代) FAX 027-253-0057
http://fujita-biz.co.jp/ E-mail fbp-npo.spirit@k5.dion.ne.jp

戸建からレジデンス ペットとくらす アパ|マン

大小店舗オフィス 倉庫工場 店舗|事務所

個人から法人 建物|土地

不動産有効利用 不動産活用

ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

住宅ローン「金利選択プラン」
選べる魅力で快適な住まいづくり

マイカーローン
自動車の購入・車検等に

教育ローン「仕送り名人」
入学金・授業料・仕送り費用に

住宅リフォームローン
ご自宅の増改築・補修・改修費用に

「ナイスサポートカード」カードローン
ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能

フリーローン「おまとめ太郎」
ご返済をまとめて一本化

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。
群馬銀行ダイレクトセンター
0120-139138 受付時間 9:00～20:00
土・日・祝休日、12/31～1/3は除きます。

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

編集後記

◇秋の深まりと共に気温の低下が進むと、やはり『こたつ』の使用は欠かせない。最近の住宅では、和室も少なくなり、こたつを持っていない家も、多くなっているらしい。

　しかし、我が家では必需品である。私にとっては、子供の頃から愛用し、寒さをしのぐ道具として、当たり前の存在なのだが･･･。ストーブ、こたつ、ファンヒーター、ホットカーペット、暖房機能付エアコン。考えてみると、現代には多くの暖房設備があり、育った環境によって、使用状況は様々だろう。

　世界的にみても、こたつを愛用している民族は、日本人くらいなのかもしれないが、来日した外国人には、どんな印象を持たれるのだろうか。この季節、せっかく日本に来たのなら、ぜひ、〝こたつでみかんを食べる〟というおもてなしを体験して欲しいものだ。

　そして、生まれ変わるなら、こたつを持っている家に飼われている猫になるのが最高かも！と思わせる季節でもある。　（ＮＨ）

◇本誌希望の方は、送料（140円×希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事　大 澤 正 明

ⓒ 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化 ●第136号 ●平成25年11月25日発行（年4回発行）●発行人 福島金夫
●発行所 〒371-0801 前橋市文京町二丁目20-22 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www. gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目18-7